

ったので、君たちのどちらかがやめてくれんかと言いますよ。「冗談じゃない。この恐慌の中、半年もただ働きさせて、今頃になってやめてくれなんて言われても困ります。」と一応抗議したんですよ。そうしたら、「そりゃそうだろう。君たちも困るだろう。それで相談だが予算は一人前しかないんだから二人で半分づつじゃどうか。」と話が合ったんですよ。言う方も言う方なんです。(笑い)

まあ、あの時初任給が七十円でしたからね。半分で三十五円。今までは「タダ」だったんだから、「タダ」に較べりゃいくらかましだと思って承知したんです。これがNHKに入った始まりなんです。NHKもひどい所ですよ。(笑い)

受信料は有効に

熊本には昭和三十四年から二年間、中央放送局次長として勤務したんですが、現在の放送会館の建設でいろいろと熊本

の皆さんにはお世話になりました。以前は大洋デパートの裏にあったんですよ。NHKは大洋デパートが建って、太陽が見えなくなっていました。(笑い)

まあ、熊本中央放送局も現在は、中央という字はとってありますが、中央放送局というのは全国に七カ所しかないんですよ。これの福岡移転の話が、よく出たんですが、私は言っていたんですよ。「地図を広げてよく見る。」と。熊本は九州のへその部分、中央部分で、地の利は熊本が一番なんだとね。福岡が非常に発展していますからね。熊本の皆さんもがんばって下さいよ。

マスコミは

自然とした態度で

NHKは民放と違って、放送法で受信料というものを特許されている事業体ですから、これをむだに使用することなく、最も有効に使わなくてはいけない義務がありますよ。それは日進月歩の放送技術の進歩発展に積極的に取り組み、世界におくれをとることがないようにしてははいけないと思いますよ。もう一つは文化の創造者として豊かな番組制作を積極的に推進して、国民の皆さんの付託に答えるべきだと思いますね。



熊本に住んで幸せ

E・E・スプア



私が三十年前八代に着いて以来、私という西洋人が東洋の作法や習慣に何度何度も反してもそれを暖かく許してくれた方々に大きな感謝の気持ちを抱いておられます。私の今まで住んだことのある熊本市、植木町、鹿本町、それと十五年間も住んでいる高森町でも同じです。

私はカナダに帰るたびに大きな文化的な衝突を受けることがあります。知らない間に私の考えだけでなく身体までが東洋化(日本化)されているのです。た

大変いいことだと思えますよ。NHKテレビが二波、民放三波、ラジオがNHK二波、ラジオ熊本、それとFMが申請中です。九波あるわけですね。ただね、一般的に言えば、この頃は情報過多、と言いますか、情報の洪水と言うか、放送だけじゃない印刷物も含めて、どうしようもない程情報の洪水があるわけですよ。その中で受け手の方の大衆は、言うならば右往左往しているようなものでして、これはやっぱり、立派な筋道のおおった放送をやるのが広いサービスエリアを持つ放送事業者の責任だと思いますよ。もうすでに、情報過多のためのいろんな弊害が指摘されていますね。伊豆の地震では間違った情報が流れて大さわぎしたとか、この間も、平塚で誤報があったりですね。一つ間違えば人命にかかりま

IC産業の誘致を

熊本は農業県だと言われていますが、私はほとんど郷里をはなれていますので、意見を述べる資格ありませんが、これからの農業の発展は多過ぎる農業人口を他の産業にどうやって吸収していくかだと思いますよ。そうやって農業基盤

の整備、拡大を図り機械化していくことが大事だと思いますね。たまたま熊本が農業県にあまんじたのは、要するに港がなかったからだと思えますよ。大きな物を運ぶのに船が使えず鉄道しかないわけですから、大きな産業がおこらなかつたわけです。



民話

れん平さんの狼(山犬)退治

佐敷太郎の国道が、まだ佐敷の道川内を通っていたところ(旧々国道)佐敷にれん平さんという人がいました。れん平さんのうちは、代々おさむらいさんで、れん平さんも剣術、馬術、弓術等すぐれている人でした。体は小柄で、あまり見かけは強そうではありませんでした。

そのころ、熊本へ行くには、朝早く佐敷を出て八代で一泊し、次の朝熊本に着くのが普通でした。

ある時、れん平さんは、熊本に用件があつてその帰りみち、田浦あたりで日が暮れ佐敷太郎峠近くに来た時は、日はすっかり暮れてしましました。

れん平さんは、「やあ、日がくれたぞ狼でも出ないか」と、ひとりごとをいいながら峠にさしかかりました。すると案の定あちこちの暗がりから狼があらわれ、れん平さんをつりまいて今にも

飛びかからんばかりになりました。武術に長じたれん平さんは、何かいい方法はないかと心を落ちつけて考えました。れん平さんは、熊本のみやげに竹箸五十人前買っていました。れん平さんは、「よし、これこれ」と、背中から竹箸を出して身がまえました。

れん平さんは、自分を取りかこんだ狼の数をかぞえてみました。狼は九十九匹いることがわかりました。やがて狼達はジリジリれん平さんにせまり、最初の一匹がれん平さんめがけて大きな口をあけて飛びかかりました。れん平さんは、持っていた百本の中の一木で、狼の口をつばりました。狼は口をつばられて、どうすることもできません。次に、二匹目の狼が飛びかかって来ました。れん平さんは二本目の箸で、二匹目の狼を一匹目の狼のように手ぎわよくさばきました。

三匹目続いて四匹目れん平さんは、飛びかかってくる狼のあごを次々に箸でつばり、九十九匹ともつばり五十人前の竹箸の最後の一本が残り残りました。れん平さんは、その一本を持って家に帰り、武勇伝を話しました。それからしばらくの間、佐敷太郎の峠には、竹箸であごをつばられた狼が、あちこちに、うろろろしていたというこ

とです。(芦北ふるさと会、あしきたの民話、伝説より)